■ 2023.11.25　No263

脱原発情報

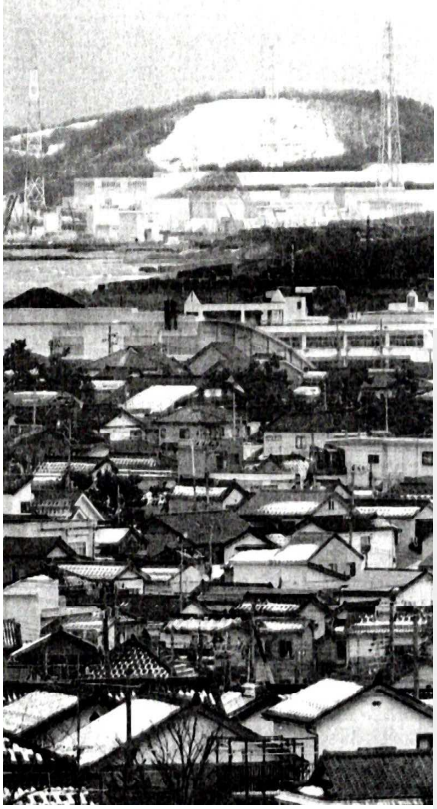
発行　双葉地方原発反対同盟　　責任者　石丸小四郎
970 － 8026　いわき市平童子町３－６　Ⅱ 903
TEL・FAX　0246-25-7737　携帯　090-4477-1641
E -mil：ishimaru19430106@gmail. com　ブログ「石丸日記」

原子力規制委員長
柏崎刈羽原発「検査は最終段階に入った」と語った！

原子力規制委員会の山中伸介委員長は 15 日の記者会見で「柏崎刈羽原発の検査は最終段階に入り、終了の見通しが立った」との認識を示した。このニュースを見て“驚愕”の思いに駆られた！

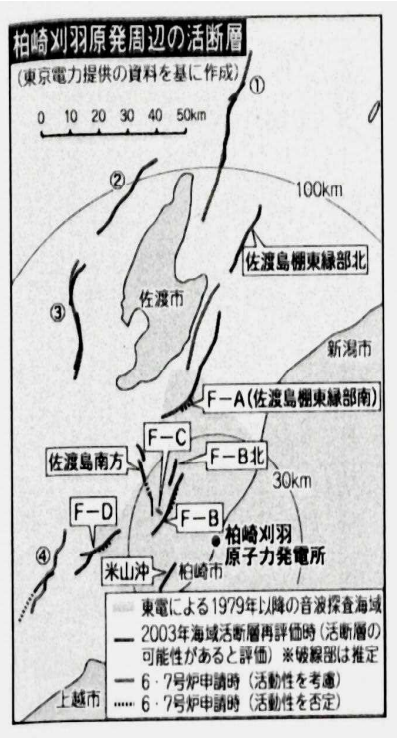
（資料１）の柏崎刈羽原発は規制委が 2021 年４月に柏崎刈羽原発の核燃料の移動命令を発令している。これは「東電は原発を運転してはならない！」と言う命令である。

これまで約２年間の検査では、設備更新や人員配置など計 27 項目を確認してきた。しかし、外部からの不正侵入を検知する設備の誤警報が多すぎて監視業務に影響が出ていること、更に改善した取り組を一時的なものにしないチェック体制が不十としていた。そのため今年５月に再発防止策が不十分として命令の継続を決めていた。それが半年で「検査は最終段階に入った」とのたまったのだ！６月には、新設した侵入対策の照明８台が電源につながっておらず、半年余り点灯できない状態が続いていた。



（資料１）上は激震に直面し停止した柏崎刈羽原発と住宅が密集する柏崎市…右は断層の疑いがある７本を公表せず国はそれを黙認していたのだ！

それだけではない！（資料１）右下の同原発の活断層、「第三章　封印された活断層」＊で次のように記されている。「中越沖地震で被災した東京電力柏崎刈羽原発の周辺海域には、実にいくつもの『活断層』が眠っていた。東電は中越沖地震の震源断層ともされる『F － B 断層』＝図参照=について設置許可申請時の評価を覆し、地震後の海域調査の暫定評価で活断層だったとした。さらに 2003 年、これを含めた活断層の疑いがある断層７本を把握しながら公表せず、報告を受けた国もそれを黙認していた。」なんとしたものであろうか！



改めて言いたい！東電には原発を運転する能力は全くない！あるのは嘘つき隠蔽体質だけである！

福島第一原発を運開始したのが 1971 年…それをズーッと見てきて隠蔽体質だけで今の事態をもたらした！更に「ALPS 多核種除去設備」なるもので“汚染水”をウソをつきつき海に流し続けるのだ…このままではまた“過酷事故”を起こす！

東電には原発を運転させてはならない！

再開後７５回　東電交渉
ALPS配管洗浄作業で高線量被曝事故発生！

先月 10 月 25 日、ALPS 多核種除去設備の前処理施設で除染作業中「洗浄廃液」が飛散し高線量被曝事故が発生した。これらの問題で再開後７５回目の交渉が行われた。

最初に右下の「増設 ALPS 配管洗浄作業での身体汚染による労働者被曝事故についての要請書」を交付した。

（諸団体）～この要請書の中身を質問させて頂いた後で前回の課題について伺って行きたい。更に、質問の趣旨は①最大の被曝線量はどの程度だったのか？②漏れた漏洩機の放射線量はどの程度だったのか？③当初100㍉㍑の後、変更され数㍑となったのは何故か？④漏洩物を撤去したと言うが、どのような方法で行ったのか？

この４つを教えて欲しい。

（東電）～現在、原因調査中なので、まとめて次回に公表回答したい。

（諸団体）～こんな程度の内容なら表面放射線など計っていなければならないはずだ。現場確認をしたであろう！全部、分かっての話ではないのか？

（東電）～再度言うが次回にまとめて回答したい。

（諸団体）～言えないということか？事故が起きてから今日で20 日になる！それでも、まだ調査中なのか…人の命がかかっている。この問題は東電の悪しき体質を表す最たるものだ…どうなのか？

（東電）～次回まとめて回答したい。

（諸団体）～今、分かるものはあるだろう？いま質問したものも要請書の中身も全然答えないと言うことか？メデア発表もあり、次回だとは納得できない！分かる問題はあるだろう？

（東電）～当初、漏洩量を作業員が「100㍉㍑が床に落ちていた」と話していたが再度聞き取りしたところ「数㍑」と話していたと言う。「数㍑」に訂正したのは、このような経緯があったからである。

東京電力ホールデングス（株）代表執行役社長　小早川　智明　様

2023 年 11 月 15 日

増設 ALPS 配管洗浄作業での身体汚染による労働者被曝事故についての要請書

貴社は、2023 年 10 月 25 日、福島第一原子力発電所において、増設 ALPS のクロスフローフィルタ出口配管内の洗浄作業において身体汚染が発生したと公表しました。

貴社の概要説明によれば、洗浄作業中に、洗浄廃液を移送していた受入タンク内から仮設ホースが外れ、作業をしていた協力企業作業員２名に洗浄廃液が飛散し、外れたホースをタンク内に戻した作業員１名に β 線 6.6mSv で APD の鳴動を確認、ER にて汚染測定の結果、作業にあたっていた５名のうち洗浄廃液が飛散した２名と飛散水の清掃にあたった２名に身体汚染があり、除染を実施したが洗浄廃液が飛散した２名は、退出基準(4Bq/cm2)以下までの除染が困難なため、福島県立医科大学附属病院へ搬送、入院。病院での処置後、10 月 28 日に退院したが、元請け企業によると、現時点で体調面に問題はなく、汚染部位の皮膚に特に異常は確認されていない、としています。

貴社は、ホース先端がタンクから外れた原因は、配管内部に溜まった炭酸塩と洗浄薬液(硝酸)の反応によって発生したガスが勢いよく排出され、タンクから外れたものと説明しています。

この ALPS 設備内部で炭酸塩スラリーを硝酸で溶解させる洗浄は、ALPS の運用に不可欠な作業とされ、今回の事故は、前処理設備から吸着塔につながる配管内の洗浄を実施していた際、洗浄廃液を移送していた受け入れタンクから仮設ホースが外れ、汚染水が飛散し、身体汚染するという、作業管理の失敗事故であり、汚染水が ALPS を通過するときに除去された、放射性物質が凝縮された炭酸塩スラリーを含む高濃度の洗浄廃液をかぶったもので、重大な汚染水作業被曝事故です。現時点で、身体汚染による被曝の実効線量や皮膚の等価線量の評価も明らかではありません。

貴社は、当初の発表では、漏えい量 100mL、作業員は一次請け５名の作業班としていましたが、その後、漏えい量も数Ｌで正確な量は評価中とし、作業員は三次請け３社が入っており、作業班長も現場には入らなかったことを認めました。経験の浅い三次請け作業員が作業班長の不在のまま危険業務を実施したことは不適切な作業管理であり、東京電力の作業管理に問題があります。多重下請け構造の中で、東京電力の責任を曖昧にすることは許されません。

貴社は、今後の飛散対策として、「適切な固縛位置を計画する。工事監理員および工事担当者は、計画通りの固縛位置になっていることを作業開始前に確認することとする。」また、汚染対策として「作業に適した装備の徹底を図る。水を扱わない作業者であっても、水の飛散により汚染する恐れがある場合は、アノラックを着用する。」と説明しています。

しかし、2013 年にも汚染水を被り身体汚染した被曝事故があり、その際も再発防止を誓っていながら、今回も装備の不備、作業計画の不備など作業班が不完全のまま危険業務を実施させたのは東京電力です。貴社の作業管理の不備、効率優先の企業体質が改善されない限り、事故の再発防止は不可能です。

この際、汚染水処理はじめ現場で働く作業員を守るため、以下、強く要請し誠意ある回答を求めるものです。

記

1、　本件被曝事故と作業管理の失敗の原因を徹底究明し明らかにすること。
2、　身体汚染による被曝の実効線量や皮膚の等価線量の評価を明らかすること。
3、　作業管理の不備、効率優先の企業体質を改善し、装備の不備、作業計画の不備のまま危険業務に従事させないこと。
4、　身体汚染に関わる福島第一原子力発電所特定原子力施設に係る実施計画を遵守し、労働者被曝事故の根絶を図ること。

命を守る三春の会　風下の会福島　脱原発の日実行委員会福島　脱原発福島ネットワーク
脱原発緑ネット　ハイロアクション福島　福島原発 30 キロひとの会　双葉地方原発反対同盟
フクシマ原発労働者相談センター　　ふくしまWAWAWA―環・話・和―の会

（諸団体）～現場確認はしているのか？

（東電）～聞き取りが十分ではない。今日、来ている３人には情報は乏しいからである。

（諸団体）～ネット情報では「線量が振り切れた！」とある。どういう状況なのか…とても心配している！経験者は何人いたのか？５人は熟練者なのか…人数を教えて欲しい？

（東電）～警報が鳴った。下腹部にかかって振り切れたと言っている。放射能の強さを表すベクレルについては確認していない。

（諸団体）～要請書の 12 行目にある「ALPS 設備内部で炭酸塩スラリーを硝酸で溶解させる洗浄は ALPS の運用では不可欠の作業とされる…」とあるが、その通りなのか？

（東電）～そうです。

（諸団体）～私共の説明はポワーポイントの動画で行いたい。（資料２）のスラリーはドロドロの液体状で、その多くは猛毒のストロンチウム 90 と言われている。その固まったスラリーを溶解させる課程で起きたと見ている。それで間違いないか？（資料３）のスラリーの線量は100万～4,000万Bq/cm3と凄い線量だ！豆粒大の物が殺人的線量になる！

（資料２）ドロドロの液体状で猛毒のストロンチウム 90

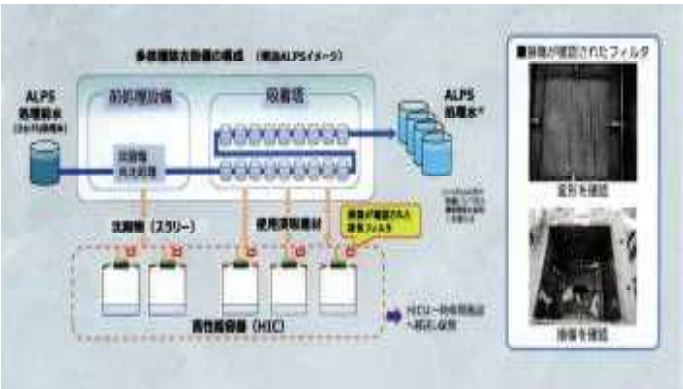
【参考】スラリーの性状

TEPCO

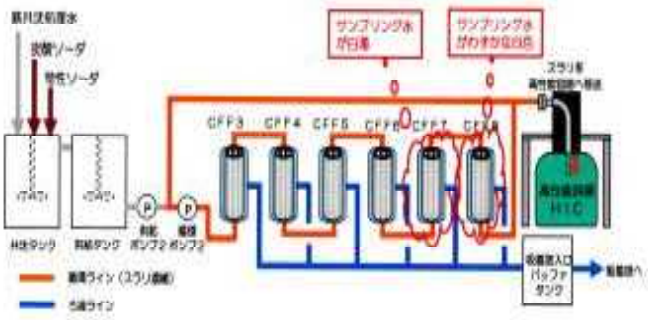
● 多核種除去設備にて発生するスラリーの主要成分他は以下の通り。

発生元	内容物，主要成分	代表的な核種濃度	貯蔵形態・保管場所
多核種除去設備（既設ALPS）	鉄共沈スラリー：$FeO(OH)\cdot H_2O$	^{90}Sr: 約1×10^{8}Bq/cm^3	高性能容器(HIC)・セシウム吸着塔一時保管施設(第二施設・第三施設)
増設多核種除去設備（増設ALPS）	炭酸塩スラリー：$CaCO_3$，$Mg(OH)_2$	^{90}Sr: 約4×10^{7}Bq/cm^3	

（資料３）　性状は100万～4,000万Bq/cm3と凄い線量だ！



（資料４）労働者が最も嫌う場所に三次下請けの労働者が…



（資料５）緑色のHICに入る所の下部配管が破裂したのだ！

（東電）～黙して語らず。

（諸団体）～（資料４）の左上から「前処理設備」を経て「吸着塔」の配管で起きたと、あるメデァでは書いていた。それを拡大したものが（資料５）の赤と緑の配管のどちらなのか？

（東電）～緑色のHICに入る直前の青色下部配管が破損した場所である。

（諸団体）～この部分は昔から「メンテナンスも大変な場所だ！」と言われてきた。そのよい例が 2021 年 10 月の「損傷が確認された排気フィルタ」で全 76 箇所中 32 箇所で損傷していた。それを２年前に確認したけれど、線量が高くてメンテナンス出来ないために、そのままにしていて規制庁から「不適合」と判断された場所なのだ！

（東電）～黙して語らず。

（諸団体）～固まったスラリー（大部分が Sr-90）を硝酸で溶解させたと言うが硝酸は消防法では「危険物」の指定がされている物質だ！こんな物質を扱うのに「第三次下請け」で内容が良く分からず責任者もいない現場で作業させたのか？東電とは、どういう会社なのか聞いてあきれるしかない！

もう一度聞く、防護服が何なのか？水処理施設で働く場合は「カバーオールは二重の物でアノラック」が必至という項目が出ている！

（東電）～黙して語らず。

（諸団体）～（資料６）を見て欲しい！今から９年前の第19回特定原子力施設監視・評価検討会の「議事録60頁」にある規制庁の「小坂福島地域統括官」の話である。それを見ると「現場でクロスフローフィルタのところを確認に行ったんですけれども、緩衝物があってなかなかこれ取りかえるのが大変で、これは取りかえを１個やったんですけれども、1,000mSv以上ですが…」とある。リンパ球の減少など身体に大きな影響を与える場所なのだ！「ALPS 多核種除去設備」とは、こういう殺人的場所いっぱいある施設なのだ！分かっているのか？

（東電）～黙して語らず。

（諸団体）～（資料７）を見て欲しい！これは「多核種除去設備の運転に伴うリスク評価」である。何よりも驚くのは「制御室は多核種除去設備設置エリアより約900 m離れた位置に置けと…」と指示しているのだ！

（東電）～「多核種除去設備」のエリアには施錠して人が入れなくしている。

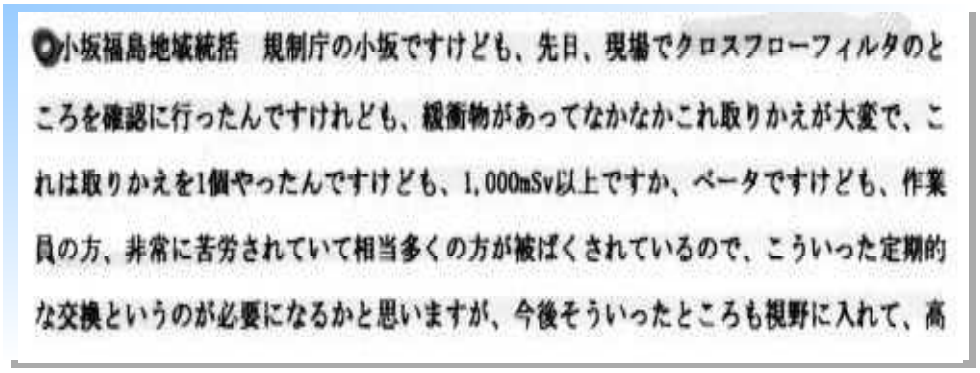
（諸団体）～処理水にβ核種の影響により作業環境に注意するよう！指示が出ている。労働者を入れた場合それを喚起したか？

（東電）～黙して語らず。

（諸団体）～３月16日の「理解と合意なき汚染水の中止を求める要請書」の再回答を求める。特に「漁業者にはどのような利益になるのか？」が最大の関心事だ！

（東電）～文書を長々と読み上げる。

（諸団体）～何で文書を見て読み上げ長々と説明するのか…それは時間稼ぎなのか？　（終了）


小坂福島地域統括　規制庁の小坂ですけども、先日、現場でクロスフローフィルタのところを確認に行ったんですけれども、緩衝物があってなかなかこれ取りかえが大変で、これは取りかえを1個やったんですけども、1,000mSv以上ですか、ベータですけども、作業員の方、非常に苦労されていて相当多くの方が被ばくされているので、こういった定期的な交換というのが必要になるかと思いますが、今後そういったところも視野に入れて、高

（資料６）　アルミニウムなどで遮るベータ線を出すところで1,000mSV とは！

多核種除去設備の運転に伴うリスク評価

■ 作業員被ばくリスクに対する対策

（設計上の考慮）

- 多核種除去設備の機器は、各機器から１ m の距離において 1mSv 以下になるよう設計
- 主な運転及び監視操作は、制御室から遠隔操作にて実施可能
- 制御室は、多核種除去設備設置エリアより約 900 m離れた位置に設備の運転に伴う制御室の線量増加は３μ Sv／年程度

（放射線防護対策）

- 運転操作に係る放射線業務従事者以外の者が不要に近づくことのないよう、当該区域を周知すると共に標識などを設ける。

（個人被ばく管理）

- 処理水中に多量に含まれるβ核種の影響によりβ線量率の高い作業環境にとなることが想定されるのため、下記の線量管理を実施する。

・作業に応じて被ばくする線源や作業姿勢を考慮し適切な放射線測定器（β線測定用線量計、リングバッチ等々）を着用させること…。

（資料７）　これを見ると人が入って作業する場所だとは、とても思えない施設だ！

（資料８）この不可解な施設に覆いを架け施錠して入れなくしていると…

良心的科学者・研究者を閉め出す原子力村！
こうして科学的アプローチは抹殺された

斉藤 章一

原子力は悲しいことにアメリカの原子爆弾開発と「ヒロシマ・長崎への投下」によって世界に衝撃をもって呪いの扉をあけた。この史上最悪の非人道的暴挙によって多くの一般市民が一瞬にして命を奪われ、生き残った人々も 78 年後の今日まで原爆症で苦しんでいる。

原爆投下後、この爆弾の威力に驚愕し、一般市民を巻き込んだ大虐殺行為に対する国際的批判を恐れた米国は広島・長崎を世界のマスコミから隔離し「原爆を軍事機密」として一切の情報を厳しく管理した。

当時軍医として治療に当たった肥田舜太郎氏は「原爆症」という言葉さえ使えなかったと述懐している。

米国の国民や世界の人々が広島の被爆者の惨状を知るのは 1 年後、1946 年 8 月ニューヨーカー誌にジョン・ハーシーの「ヒロシマ」が厳しい検閲をかいくぐり発表された時だ。　この記事が世界中に大惨劇として衝撃を与えたことは間違いない。

米国は原爆投下後も、その先も原爆の悲惨な被爆者の現実を隠すことに全力を尽くした。軍や科学者による詳細な調査や研究を実施したにも関わらず、対外的には爆発による直接的被害以外は「なかったこと」とされたのである。

放射線防護の基礎的データは広島・長崎の調査が基本にある。それが当初から意図的にゆがめられていたし、今日でもその延長線上にあることは否めない。**（資料９）**を見てほしい。これは本誌の発行責任者石丸小四郎氏が所蔵していた 1989 年 1 月 30 日の毎日新聞の記事である。今から 34 年前、富岡町の S 医院の院長が原発労働者の血液を福島県環境医学研究所に譲渡していた。その血液の分析結果がこの記事である。原発労働者が一般の人と比べ「２倍近い染色体異常」を見つけていた。最高値は「６倍近い」というニュースは原発で働く人が多い富岡町や近隣町村の住人にはショッキングなものであった。

（資料９）　研究者は移動となり研究所は廃止された？

その後この研究に関わった２名の医師は「移動」となりやがて大熊町にあったこの研究所は廃止された。

世界中で起きていた迫害はカナダでも起きていた。カナダ原子力公社研究所である。ここで細胞膜と放射線の研究していた**ペトカウ博士は「放射線によって生じる活性酸素は細胞膜の脂質と作用して過酸化脂質を生成し細胞を損傷する。低線量では活性酸素の密度が低く再結合する割合が少なく効率よく細胞膜に達し、細胞膜に達すると連鎖反応がおこるため放射線の影響は低線量で急激に高まる」という”ペトカウ効果”を発見した。**しかし、活性酸素を消す SOD の研究途中で研究所を閉鎖された。その後は研究に戻ることなく地元で医師として働き 2011 年 1 月 18 日、その生涯を終えた。**（資料 10）**この方には何度も登場していただいた。NHK の「追跡！真相ファイル」のインタビューにこう答えた「政府や原子力業界から強い要請があった。科学的根拠はなかったが ICRP の判断で決めたのだ」

（資料 10）当時 ICRP 委員 チャールズ・マインホールド氏

原発汚染水…
タンク16基分減少し約３０年先まで放出か？

17 日、メデアは（資料11）のように「処理水タンク 16 基分減少」と伝えている。相変わらず「ALPS 多核種除去設備で二次処理した」と言う報道は全くないのが実態である。

東電の計画では、貯蔵量の約２％にあたる約３万 1,00 ㌧を４回（各回約 7,800 ㌧）に分けて放出するという。

１回目は８月 24 ～９月 11 日、２回目は 10 月 5 ～ 23 日放出。３回目は今月２日から行っていた。

20 日午前からは放出設備の配管に一部残っていた処理水を押し出す作業を開始し正午過ぎに終えたと言う。

私たちは、この海洋放出を「汚染水放出」と主張している。

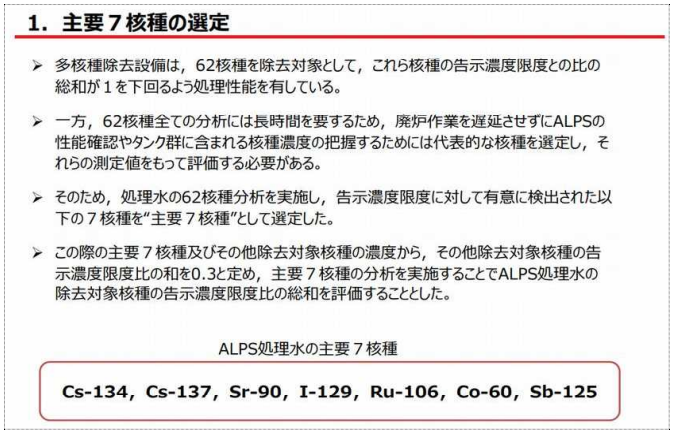
それは何故か？

（資料１２）を見て欲しい。これは東電 HD の 2020 年 9 月 14 日の文書で「ALPS 処理水の全ベータ値と主要７核種の合計値のかい離について」と言う分かりにくい表現の文書がある。

一番目の➢は「多核種除去設備は 62 核種を除去対象として核種の告示濃度限度との比の総和が１を下回る処理性能を有している」としている。ALPS 多核種除去設備は告示濃度限界まで処理する能力を持っている！と誇ったものである。

２つ目は➢「62 核種、すべてを分析するには時間を要するため主要７核種を選定し評価する方法を取っている」としている。

（資料11）今月トラブルなしで２回目7,788㌧放出だと言う



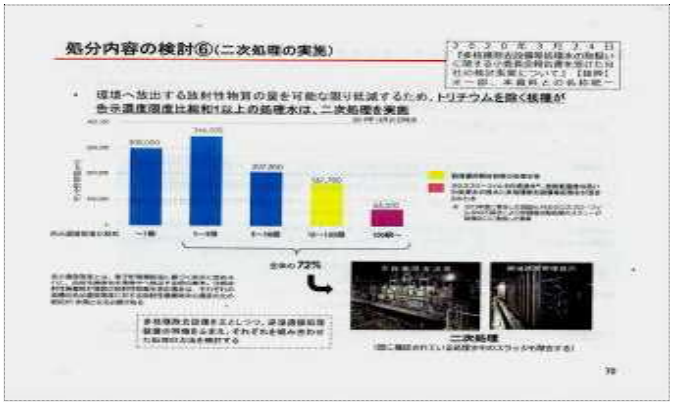
1. 主要７核種の選定

- 多核種除去設備は，62核種を除去対象として，これら核種の告示濃度限度との比の総和が１を下回るよう処理性能を有している。
- 一方，62核種全ての分析には長時間を要するため，廃炉作業を遅延させずにALPSの性能確認やタンク群に含まれる核種濃度の把握するためには代表的な核種を選定し，それらの測定値をもって評価する必要がある。
- そのため，処理水の62核種分析を実施し，告示濃度限度に対して有意に検出された以下の７核種を"主要７核種"として選定した。
- この際の主要７核種及びその他除去対象核種の濃度から，その他除去対象核種の告示濃度限度比の和を0.3と定め，主要７核種の分析を実施することでALPS処理水の除去対象核種の告示濃度限度比の総和を評価することとした。

ALPS処理水の主要７核種

Cs-134, Cs-137, Sr-90, I-129, Ru-106, Co-60, Sb-125

（資料12）　□の枠の７核種は大幅に超えているのだ！



（資料13）　二次処理が必要な汚染水は 72 ％もある

３つ目の➢は下の□にその７核種を左から順に「セシウム 134・同 137・ストロンチウム 90・ヨウ素 129・ルテニウム 106・コバルト 60・アンチモン 125 を選定した。

最後の➢は「…告示濃度限度比の和を 0.3 と定めて…」て計ったら「告示濃度のそう和 0.3 を大幅に超えている！」としたものである。

そこで東電は（資料13）にある通り「トリチウムを除く核種が告示濃度比総和１以上の処理水を二次処理を実施し…」とした、お分かりのように、ここでも「0.3 を１」にして誤魔化したのである。

しかも全体の 72 ％が告示濃度を超えているため、それを右下の写真の「ALPS 多核種除去設備」で「二次処理」処理すると言うのだ。

しかし、「二次処理」が行われた形跡は全くない！

出典　文献

・（資料１）原発と地震～柏崎刈羽「震度７」の警告・新潟日報社特別取材班・（資料２～５）東京電力 HD・（資料６）第 19 回特定原子力施設監視・評価検討会・議事録 60 頁・（資料７～８・11 ～ 12）東京電力 HD・（資料９）毎日新聞 1989.1.30（資料 10）NHK「追跡！真相ファイル・（資料 13）NHK ニュース　※（資料）と同じ